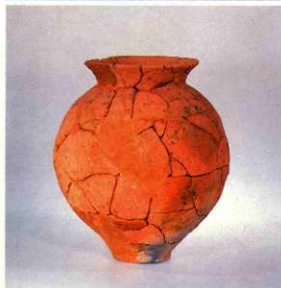




尻 坂 遺 跡

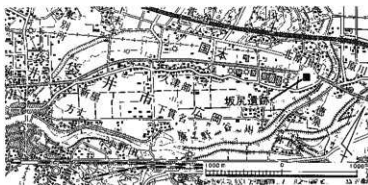


1 9 8 6

シノムラ化学工業株式会社
静岡県袋井市教育委員会

例 言

- (1) 本書は昭和60年4月4日から昭和61年3月31日まで実施した袋井市国本地内のシノムラ化学工業㈱の工場増築に係る坂尻(さかじり)遺跡内の緊急発掘調査報告書である。
- (2) 本調査は、シノムラ化学工業㈱静岡工場 取締役・工場長 初本馨氏を委託者とし、袋井市長 湖東二郎を受託者として袋井市教育委員会が実施したものである。
- (3) 発掘調査は吉岡伸夫、永井義博(袋井市教育委員会)が担当した。
- (4) 本書の執筆、編集は永井義博が行った。
- (5) 発掘調査参加者は次のとおりである。(敬称略)
波辺菊男、大橋庄一、川島良一、大庭嘉平、三浦久雄、佐藤好孝、早川保子
大庭泰子、三浦とく江、山本まさ子、内山英子、白井洋子、寺田妙子
- (6) 本書で使用した挿図は早川保子(遺構)、白井洋子(遺物)、永井義博(その他)が作成し、遺構、遺物写真は永井義博が撮影した。出土品整理は白井洋子、早川保子、寺田妙子、内山英子が行った。
- (7) 本調査に係る事務は袋井市教育委員会社会教育課職員が行った。
- (8) 調査資料はすべて袋井市教育委員会が保管している。
- (9) 調査にあたっては初本馨工場長をはじめシノムラ化学工業㈱の社員の皆様の全面的な協力を得た。ここに記して感謝したい。



坂尻遺跡位置図

〔表紙 シノムラ化学工業㈱静岡工場内出土遺物カラー写真〕

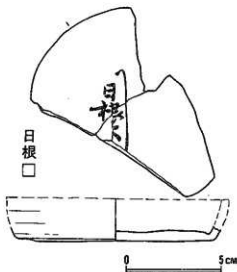


(1) 出土品が語る坂尻遺跡のプロフィール

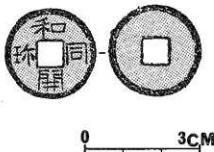
袋井市の東端、名栗・北原川一帯に位置する坂尻遺跡は古墳時代(約1700年～1300年前)から奈良・平安時代(約1300年～800年前)ごろに栄えた遺跡です。このうち奈良・平安時代には全国でもめずらしい官衙跡(昔の役所のあと)であったため、TVや新聞でさかんに報道されました。坂尻遺跡は大きく分けて2つの施設が考えられ1つは「佐野郡家」と呼ばれるもので、昔この地方一帯が佐野郡と呼ばれていたころの郡役所のあとで、もう1つは「日根驛家」として旧東海道を通る公の使に駅馬を用意しその一行を先導する施設であり『和名抄』の中に日根という地名が見えることから十分想像できます。

奈良時代の坂尻遺跡を代表する遺物に和銅開珎があります。これは日本で最初に鑄造された貨銭で、『続日本紀』によると和銅元年(708)5月に銀銭が、8月には銅銭がそれぞれ発行されたとなっています。翌年には銀銭は廃止され、銅銭のみとされましたが約50年間にわたって日本各地の鑄造所で随時鑄造されたため国内をはじめ遠く朝鮮半島からも発見されています。坂尻遺跡の和銅開珎もこの時に造られたもので3枚出土しています。その他、静岡県内では伊東市の井戸川遺跡からも1点出土しています。

坂尻遺跡を奈良時代の郡衙跡といわれる理由に墨書土器があります。下の図の墨書土器は坂尻遺跡で最初に発見された土器で坏(つき)と呼ばれるお皿の底に文字が書かれていました。



「日根□」墨書土器(国1バイパス坂尻遺跡出土)



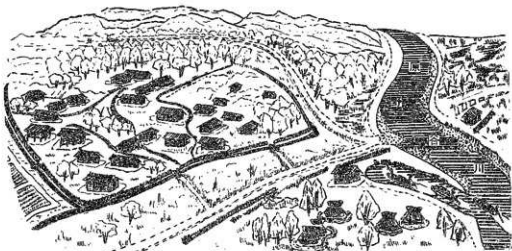
「和銅開珎」拓影

(国1バイパス坂尻遺跡出土)

このように文字が書かれていた土器は約350点あり当時の社会のしくみを知るうえで大変に貴重な資料です。役所に関連した墨書文字には次のようなものがあります。

「×野厨」「佐野厨家」=ともに佐野郡の役所にある台所のことで当時の役人たちは毎日のように宴を開き中央からきた官人や旅の貴族たちをもてなしたようです。

「日根駅家」「駅長」「駅子」「駅富」「駅」「大上日清駅家」「三年水鉢駅」=佐野郡の役所は駅家を併設していたらしく、このように駅に関連した墨書土器がたくさん出土してい

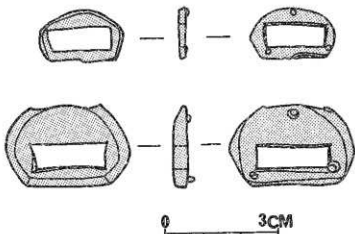


板瓦遺跡の律令時代の官衙のようす（想像図）

ます。板瓦遺跡への古代の交通路としては旧東海道にそっての陸路とともに原野谷川の水運を利用しての水上交通も十分に考えられます。昔の原野谷川は現在のように堤防を完備されていませんでしたのでたびたび洪水をおこし地質図の上でもはっきり蛇行流路が確認できます。これは普段はゆったりとした水の流れになり海から小舟でこのあたりまで簡単にのぼることができたのでしょう。

「日根」、「朽辺」→くつべ→久津部、「山科」、「西田」、「島津」、「石田」→いわた→磐田？、「板井」、「前玉」、「岡口」=この付近に残る地名・郷名です。このように周辺部各地の地名、郷名が書かれた土器が出土するということはその地域の中心的地場であった証しです。もし現在の袋井市がこのまま火山の噴火などで土に埋もれて数千年後に発掘された時いちばんたくさん地名の書かれた書類が発見されるところは袋井市役所の市民課のあたりでしょうか。

この他、人名・役職名と考えられる墨書文字には「千山」「浄主」「竹主」「人成」「足」などがあります。「日根女」などというのも日根郷出身の女性の個有名詞であったのでしょう。建物の名前を表わしたものとしては「東家」「竹寸家」→竹村家などがあり、その他変わったところでは「新家」「後家」など建物の位置・方角からや新旧から名付たと考える名称がいくつか出土しているのもおもしろい。

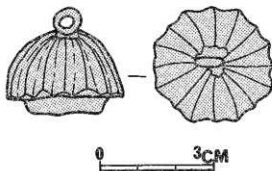


官人のベルト金具「鈐」（国1バイパス板瓦遺跡出土）

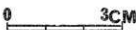
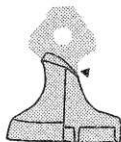
前ページ下の銚形具は役人のベルトに付けられた位をあらわす金具です。当時の「衣服令」という規則の中では図の下にある大きさの金具を付けていいのは郡の役所の人頭と呼ばれる所長クラスの官人で、小さな金具は書記官クラスの人が着装したようです。それぞれ八位と無位という位階にあたる官人たちでした。

平安時代の包含層を発掘中に出土したのが右の図の銅製の印かんです。これは「松」バイパスの発掘調査中偶然に松下さんという作業員さんが発見して調査員にとどけたのですが松下さん曰く「私の祖先の使っていたハンコかもしれない」といったエピソードが残っています。大きさは3.1cm×3.1cmで高さが残っているところまでで2.3cm、重さは27gあったそうで静岡大学の原秀三郎先生のお話しによると「松」の印文はのびやかで、ほりも深く平安時代でもかなり古い時期のものらしいとのこと。律令制度の中では、いろいろな公文書に押す印かんの大きさは詳しく決められていました。このうち官印とよばれるまつりごとに使われる印かんは中央官庁で使われた方三寸(約9cm)の大きなものから諸国(遠江国、駿河国など)の国印のように方二寸(約6cm)のものまで細かく分かれていました。このころ貴族の間で私印を使うことが流行し官印と混同されはじめて、貞観10年(868)に出された大政官符という通達の中では私印のようにプライベートな印かんは大きさを「一寸五分」を限度とすると定められました。このことから坂尻遺跡出土の「松」銅印はこの官衙に中央から長官として赴任してきた貴族が自分の名前の一文字をとって作った私印ではなかったかと想像されています。

山雲国の岡庁跡や駿河国志太郡衙跡の近くの山魁遺跡からも類似品が出土しているのが下の図の分銅です。これはハカリなどのおもりとして使われていたと考えられる八角形の銅製品で重さは82gあります。分銅を中国では権力者の力を示すものとして扱われており、律令政治が開始されるとともに日本へも導入されたと考えられています。いままでは不明銅製品としていましたが、今回の調査で中国の『中国古代度量衡図集』(文物出版社)という本の中で類例を見つけたわけです。



はかりの分銅(図1 バイパス坂尻遺跡出土)



銅印「松」(図1

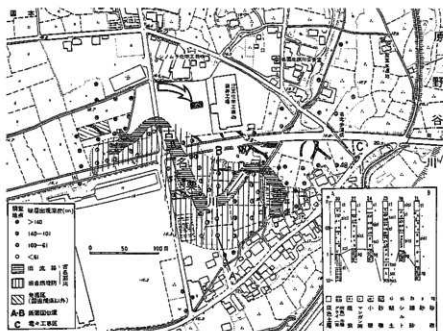
バイパス坂尻遺跡出土)

この他の遺物としてはおまつりに使ったらしい陶製の人形、馬形や木製の舟形や杵串なども出土し、土師器、須恵器などの多量の土器とあいまって、坂尻遺跡の掘立柱建物跡や住居跡の配置を検討することによって古代国家が残した地方支配の形態の一端を知ることができるでしょう。

発掘調査が進んでもう1枚下の包含層を調査しはじめるとそこは古墳時代の「ムラ」が埋まっています。発掘では、奈良・平安時代の間に堆積した厚さ30cmの褐色の土を取り除くと、そこが古墳時代の生活面です。この地面を鋤簾（じょれん）などでうすく削り取っていくと堅穴住居跡や溝跡、小穴跡や掘立柱建物跡の柱穴跡などが黒々と地面にその輪郭をあらわしてきます。坂尻遺跡の基盤層である灰色っぽい粘土層に掘られた遺跡には黒味をおびた褐色土が入っていますので比較的簡単に建物跡を見つけることができます。

図1バイパスの発掘調査に関連して付近の地形・地質を調査された静岡大学の加藤芳朗先生は坂尻遺跡の中央部から古代の川の流路が埋もれているのを発見しました。これは現地の発掘調査をしている調査員の今までの考え方を完全にくがえす画期的なことでした。下の図が地質調査の結果をまとめたものですが、これに古墳時代の住居跡などを重ねていくと古名栗川の兩岸の自然堤防が坂尻のムラの成立にかなり重要な役割をはたしていることがわかります。

古墳時代は文字どおりたくさんさんの古墳が各地に造られました。直径10m前後に丸く土を盛り上げた円墳から全長100mを超える鍵穴形をした前方後円墳、そして横穴墓まで各時期ごとにいろいろな形がありました。坂尻遺跡周辺では北原川の字佐八幡宮の境内に全長30mの前方後円墳である字佐八幡宮古墳や、東名の北側の山の上に権現山古墳（全長30m、前方後円墳）、そして富士浅間宮の東側の丘陵上に浅間山古墳（全長30m、後方後円墳）が原野谷川の流れる平野を見下すように立地しています。また坂尻遺跡北の袋井カントリークラブの中には菅ヶ谷



古名栗川と坂尻遺跡の関係

横穴群があり、隣接する掛川市域では各和の金塚古墳（全長66m、前方後円墳）や女高の瓢箪古墳（全長63m、前方後円墳）、吉岡大塚古墳（全長55m、前方後円墳）、春林院古墳（径30m、円墳）など古墳時代全般にわたっての墳墓が散在しています。

袋井、掛川市域は静岡県内でも屈指の古墳群がありますがそれを造った人々の生活の場はあまり発見されていません。板尻遺跡で発見された住居跡等はこれらの古墳の盛衰を解くカギでもあり当時の社会を復元するのにとても重要な資料です。当時の人々は、地面を掘りくぼめたところへ簡単に柱を組む屋根をふいただけの半地下式の竪穴式住居に住み近くに田んぼを作って生活したのが一般的な農民です。これら竪穴式住居が集まって1つのムラをつくり、このムラには祭りや集団で作業をおこなえる広場が中央にありました。この頃になると一般の農民の他にムラの代表者のような豊かな財産を持つものや、逆に奴隷として働かなければいけないものなど組織と階級がはっきりとしてきました。さらにこれらのムラを支配する地方豪族がいたようです。いままで豪族の住居ははっきりしませんでした。最近群馬県の三ツ寺Ⅰ遺跡や兵庫県松野遺跡など次々に館跡が発見されています。三ツ寺Ⅰ遺跡で発掘された館は幅30mの大きな掘で周囲をかこみ、1辺86mの方形の区画には二重・三重に柵を巡らし、その内側には8間×8間の巨大な建物を中心に古代豪族の屋敷が築かれていたとのこと。板尻遺跡の古墳時代の景観は建物跡のようすなどからどうやら水田耕作を中心に原野谷川を利用しながら生活していた小さなムラのような様子でした。しかし、発掘されていない地区にはもっとたくさんの住居や、もしかすると豪族の屋敷が眠っているかもしれません。しかし竪穴式住居に住む農民も館に生活する地方豪族も、中央の権力者から見るとほとんど同じに見えたのが現実です。



古墳時代の板尻遺跡のムラ

(2) 坂尻遺跡シノムラ化学(株)静岡工場内の発掘調査

今回の調査区は工場敷地内のため、厚く山土が盛土され、また工場造成工事の時に最上層の近世、中世の遺構面が攪乱されたらしくこの時期の遺物はほとんど検出されていない。奈良・平安時代の「推定佐野郡衙跡」としての遺構・遺物も少なく、そのほとんどが古墳時代の遺構であった。

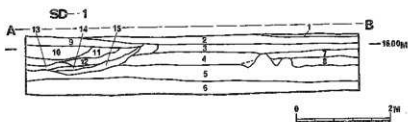
場所的には国1バイパス坂尻遺跡として発掘調査された地区より北へ約50m入ったところで奈良・平安時代の郡衙域からははずれてしまうのであろうか。古墳時代の遺構・遺物も調査区内の南西側にかたより、北東側では希薄になっている。これは古名栗川の北側の自然堤防の広がり範囲と一致しており、坂尻遺跡の位置が基本的には低湿な後背湿地にあるため限られた埋層の広がる一帯にのみ人々が生活したと思われる。

土層堆積は下図に示したとおりで第1層旧耕作土、第2層水田床土、第3層・第4層古墳時代遺物包含層、第5層・第6層砂泥りの暗灰色粘土層、第9層～第13層SD1復土、第14層・第15層SD1改修前に堆積した砂層の順である。

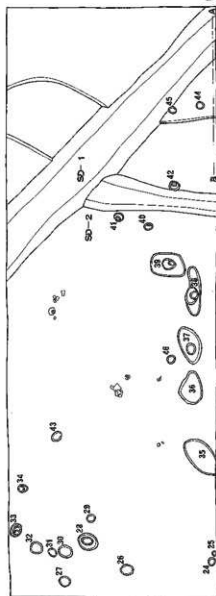
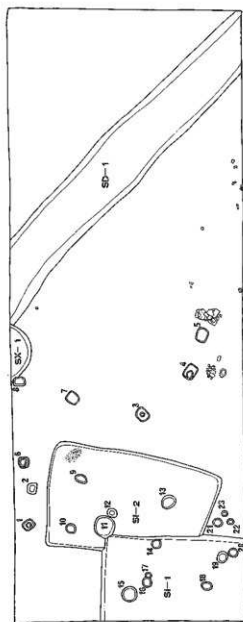
第1面[第3層下面]の遺構は竪穴状遺構(SI1、2)や溝跡(SD1)、土坑(SX1)とPit群からなる。SI1、2は竪穴住居跡状の遺構であるが確定はできない。重複しているSI2は長辺5.0m×短辺3.3mの長方形の遺構で北東コーナー付近に炭化物が検出されている。住居跡と考えるにはPit9、10、12、14を柱穴と考えたい。SI1は西側・南側が調査区外であるためその規模は確認できないがSI2とはほぼ同じと考えている。SD1は現長9.0m、幅1.7m、深さ0.35mの溝跡である。出土遺物は写真図版でもわかるとおり西側から流れ込んだ状態である。集落を巡る環濠の一部であろうか。その他、包含層内に完形に近い土師器がかなりの数量出土している。

第2面[第4層下面]で検出されているのはSD2とPit群である。SD2は幅1.7m、深さ0.35mの溝跡でSD1に切られている。Pitは北西隅で円形にまわるかと思わせるが遺構等は確定できないのが現状である。Pit35～39は浅い皿状の落ち込みである。Pit40～42は溝跡の両側に位置する杭列のようなものであろうか。

調査範囲が狭いため確定はできないが、古墳時代の坂尻遺跡遺物包含層の北東限界付近、ちょうど集落の北東側の遺構とそれを巡る環濠を検出したことになる。



調査区南側土層堆積図

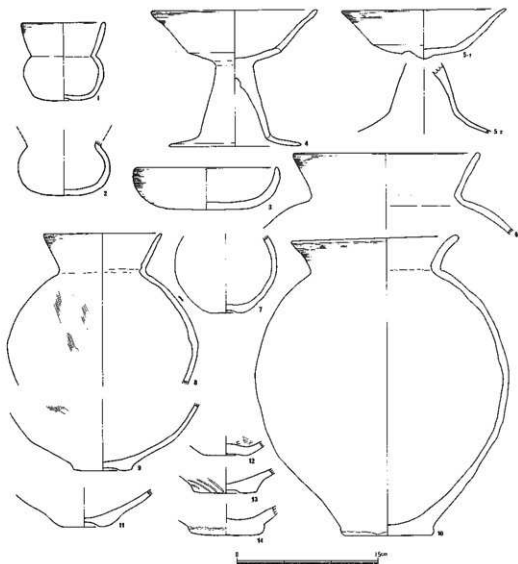


調查区遺構平面実測図 (第1面・第2面)

遺物はこのうち38点を図化した。内訳は土師器29点、須恵器10点である。

古墳時代包含層出土土師器（1～14）

1は口径8.8cm、器高8.2cmの小型広口壺である。ほぼ完形であるが表面の調整痕ははっきり確認できない。2も小型広口壺で胴部のみである。現在高5.7cmを計る。3は口径15.0cm、器高4.4cmの坏身である。4の高坏は口径17.5cm、底径14cm、器高14.3cmで残りは良い方である。表面の調整痕は不明である。5-1と5-2の高坏は出土位置がやや離れるが同一のものと思われる。坏部は口径17.4cm、現存高5.1cm、脚部は現存高7.4cmを計るが残存状態はあまりよくない。6は壺形土器の口縁部で口径19.7cm、現存高8.5cmである。7は小型壺形土器の胴部で胴部最大10.8cm、底径3.6cm、現存高8.1cmを計る。8は壺形土器で口径12.4cm、現存高16.0cmで9の底部と胎土がよく似ている。10は包含層出土土師器の中でもいちば

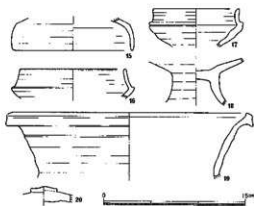


包含層出土遺物（土師器）実測図

ん保存状態が良く口径17.6cm、底形9.1cm、器高31.2cmの壺形土器である。11～14は壺形土器底部の小破片である。

古墳時代他包含層出土須恵器（15～20）

ここに図化した5点の須恵器は小片ばかりであるが包含層出土須恵器の例を紹介するためにのせた。15の坏蓋は口径12.5cm、現存高3.4cmを計る。16の坏身は口径11.2cm、現存高3.2cmである。17は小片のため数値ははっきりしない。19、20は攪乱部分からの出土であった。

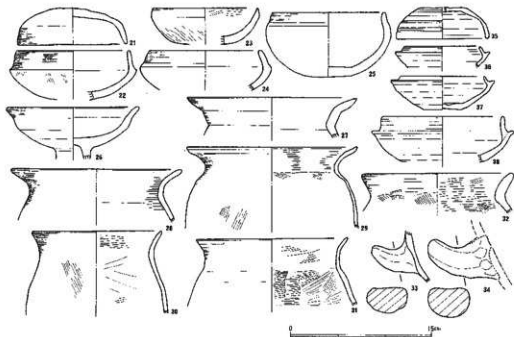


包含層出土遺物（須恵器）実測図

溝跡（SD1）出土土師器と須恵器（21～34）（35～38）

この遺物は写真図版のとおりSD1の底部から出土したものではなく溝跡の西側よりの流れ込みの堆積である。そして、この土器の入っている覆土の上層及び下層からの遺物出土量はきわめて少ない。P6のセクションにSD1がちょうどかかっているが第12層がこれらの包含層となっている。出土遺物は土師器坏蓋、坏身、高坏、甕、把手と須恵器の坏蓋、坏身であった。坏類がどれでも小片が多く回転復元であるが口径12cm前後に集中している。甕も破片ながら比較的に数が多くバラエティーに富んでいるが、やや薄手の土器が多いようである。

なお、実測図中央が一点鎖線の図は回転復元の図である。



溝跡（SD1）出土遺物実測図

(3) まとめにかえて

「坂尻」とは坂遺のはずれという意味で北原川の字佐八幡宮から南に延びる道が下り坂となつて東海道につかるあたりの小字名です。国1バイパスの発掘調査が始まったころ北原川を中心とする弥生時代の散布地「石ノ形遺跡」とは別遺跡であることをはっきりさせるため名付けた名称でしたが、これほど大規模で著名な遺跡になるとはだれも想像ができませんでした。現在では坂尻遺跡の名前は県内をはじめ全国の研究者の間に知れわたっています。

さて、今回の発掘では律令期の遺構、遺物はごくわずかで、主な遺物は古墳時代のものが多いという結果になりました。いままでの発掘調査では古墳時代前期(4世紀)、中期(5世紀)、後期(6世紀～7世紀初頭)、終末期(7世紀中頃以降)の遺物はほぼ出上しています。出土遺物のうち包含層出土の土師器はいわゆる関東で和泉式土器と呼ばれるものが多く、実測No1、4、10等は典型的な形で、小型広口壺などはやや古い要素をもっています。溝跡(SD1)出土土師器は鬼高式土器併行と思われる遺物が多いが出土遺物が小片のため詳細は不明です。やや新しい傾向があるように見受けられます。断面図でもわかるとおりSD1は数回にわたって改修をうけていると思われます。このように遺物に関してはセット関係のつかめるような出土状態ではなかったが、各時期の類別の増加には役立ったと思います。

中津地方のこれまでの古墳時代の調査というと古墳本体(お墓)の調査が中心でした。そして、ここから出土する遺物は土器や刀や玉類など優れたものが多い。しかし、これらはごく一部の限られた支配者層の人々を墓に葬るにあたって副葬した儀礼的な遺物です。これらの地方豪族や一般民衆の日々の生活を知る機会はなかなかありませんでした。そんななかで坂尻遺跡の発掘調査は古墳時代全般にわたってのムラの姿とその変遷を私たちの前に提示してくれました。人々の生活した住居跡、穀物などを貯蔵したと考えられる倉庫風の建物の柱跡、家々の間を流れる排水用の小さな溝跡、ゴミを捨てたかと思われる小穴など坂尻のムラの広い全体から比べればごく一部になるのかもしれませんが、とにかく明らかになったのです。最近、研究者の間で注目されている遺跡に群馬県宇都宮市の黒井峯遺跡があります。ここは榛名山二ツ岳の噴火により、その火山灰と軽石で一時にして全滅した古墳時代中頃のムラです。厚さ2mもある軽石層の下にあるため約1400年の間破壊されることなく、堅穴住居、平地住居、屋外作業場、畑の跡、道路跡などが当時のままの姿でまるで真空包装したように発掘されたのです。このように集落(ムラ)の調査はまだ文字をもたない古代社会のしくみや人々の行動、考え方を知るうえでたいへん重要なことです。このように坂尻遺跡の調査は数々の成果を残して今年度で終了いたしますが、残された課題としては生匠の場としての水田跡や畑跡があります。これらは近いうちに遺跡西側(大和ハウス北側など)で発見されるかもしれません。

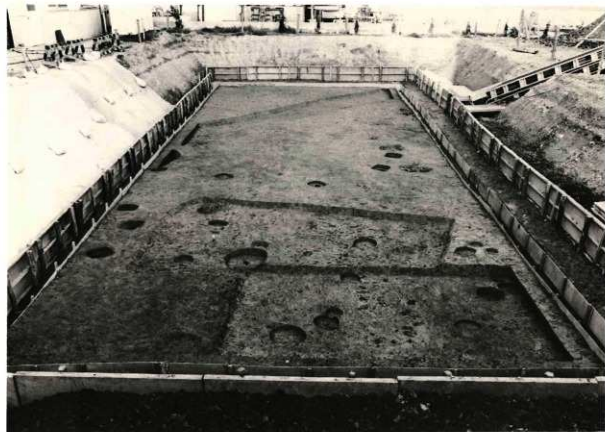
1つ1つの発掘では土器の破片や住居跡の片隅、柱穴や溝跡などしか発見できなくてもこれらの調査の積み重ねによって古代社会の復元が可能になり文字による記録を持たない時代の歴史に新たな1ページを加えることができるのです。発掘調査に全面的に協力して下さい。シノムラ化学株式会社静岡工場の皆さんに感謝いたします。(袋井市教育委員会 永井義博)

写真図版

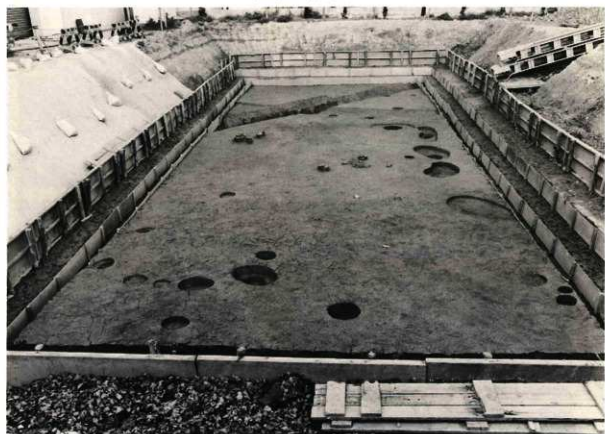


坂 尻 遺 跡
写 真 図 版





第1面完掘写真



第2面完掘写真



遺物番号 1 出土



遺物番号 4 出土



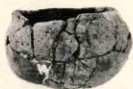
遺物番号 8 出土



遺物番号 10 出土



溝跡 (SDI) 出土遺物



2



8



5



9



3



26



7



25

シノムラ化学工業㈱静岡工場内
埋蔵文化財発掘調査報告書

坂 尻 遺 跡

1986年3月29日

編集 静岡県袋井市教育委員会©

袋井市 国本3070-1

TEL 05384 (3) 2111

印刷 株式会社 開 明 堂

浜松市中沢町1番1号